

A close-up photograph of a snail with a brown, spiral shell and a brown body, crawling on a large, vibrant green leaf. The leaf has some white spots, possibly from a pest or disease. In the background, there are other green leaves and small blue flowers with yellow centers. The overall scene is lush and natural.

漢詩を味わう

第73回

さげにたいす
対 酒 白居易

蝸牛角上争何事

蝸牛角上かぎゅうかくじょう 何事をか争ふ

石火光中寄此身

石火光中せつかこうちゅう 此の身を寄す

随富随貧且歡樂

富とみに随したがひ 貧しんに随したがひて 且しかもく歡樂かんらくせん

不開口笑是痴人

口を開いて笑はざるは 是これ痴ちじん人

かたつむりの角の上のような小さな世界で、何を争っているのか。

石を打ちあわして出づるか間の火のような、

はかない人生に仮にこの身をあずけていながら。

富むにせよ、貧しいにせよ、それなりに楽しくやろう。

口を開けて笑わないのは愚か者だ。

《蝸牛角上争》 小世界での争いにたとえる。

《石 火》 火打ち石から出る火。

《痴 人》 愚か者。癡人と作る本もある。

白居易（七七二〜八四六・字は楽天）が生まれたのは、唐の二大詩人である李白の没後十年、杜甫がなくなつた翌年です。名門の家柄の出ではなかつたですが、二十九歳で進士に及第し、陝西省の地方官を振り出しに高級官僚として要職を歴任し、最後は刑部尚書つまり法務大臣まで登りつめました。当時の文人としては珍しく出世街道を歩んだ詩人です。しかし、順風満帆という訳ではなく、安祿山の乱後、大地主階層の旧官僚と、白楽天のような進士出身の新官僚との対立があり、四十三歳のときに越権行為とがめられて江州に左遷されるといふ憂き目にも遭いました。それでもなお白楽天は数々の詩歌をつくり、人民の苦しみを無視した上層支配階級の横暴墮落や、社会の混乱を指摘し人民の窮状を訴え、また皇帝に建議し直諫もしました。白楽天がつくつた詩の多くは政治を批判し社会を批評した「諷諭詩」とよばれるもので、本誌の平成二十五年三月号で取り上げた新楽府五十首のなかの「紫蒙筆」もその一つです。しかし晩年には、公務から離れた長閑な生活の中で、つつましかな快樂の生活をうたつた「閑適詩」や、事物にふれて湧きあがる悲哀の情をうたつた「感傷詩」を作りました。

この詩を詠んだのは白楽天五十八歳のときで、太子賓客として洛陽の履道里に隠棲を始めた年です。太子賓客というのは皇太子の持つ東宮府という役所において経書などを講義する役職ですが、実際は実職をとまわらないものの俸禄はもらえる高官の隠居役です。このころ白楽天は、香山寺の僧と親しく交わり、仏教への思いを深くしていき、閑適の思想が次第に醇化されていき、「閑適詩」を多く詠むようになりま

す。第一句の「蝸牛角上何事をか争ふ」は『莊子』に見える話で、かたつむりの左の角に国を置く触氏と、右の角に国を置く蛮氏とが領地を争つて戦い、数万の死体をさらしたという寓話に拠ります。白楽天が若いころ力を注いだ「諷諭詩」の精神が垣間見えますが、後半の二句は「足るを知り和を保つ」といふ喜びを長閑な生活のなかに見つけた白楽天の達観ともいえる境地を表現しています。

ちなみに前半の二句は「和漢朗詠集」巻下雑、無常の部に引かれています。

書人傳

金きん
農のう

前号まで清代の書画篆刻を代表する文人として、何紹基、趙之謙を紹介しましたが、清代初期に異色をなす書人として特筆される金農を紹介します。

■生涯仕官せず異色の文人

金農（一六八七―一七六三）は字をはじめ司農といい、のちには嘉門と称し、冬心と号しました。浙江錢塘の出身です。金農が生まれたころは、清朝が都を北京に定めながらすでに六十年数年経過して各地の反清闘争も終わって、清代の全盛期を迎えようとしていた時代です。明末清初の王鐸、傅山らの中国のインテリや文人のほとんどは、官吏としての生活もしながらの書作でしたが、金農は生涯官途には就かず、典型的な文人の生活を送り中国の各地を遊歴しました。金農にとつての学問芸術は官吏登用試験に合格する手段ではなく、何よりも自分のためでした。

金農は三十歳まで郷里の錢塘で修業に励みました。錢塘は杭州の西湖に近くで、商工業が発達し、また中央から遠く政治に巻き込まれることも少なく、多くの芸術家や学者が集った土地柄です。金農は田畑と家屋を有したいわゆる有産階級の家で育ち、若いころから古典を学び、詩を作る環境に恵まれました。十七歳の時、近くの項霜田という人から作詩の手ほどきを受け、二十歳で会稽の毛奇齡に師事します。何れの師も金農の詩を高く評価して、金農は自信を深めました。このときに作った詩集の序文は金農自らが書いたと伝わっています。序文と

らうのが普通ですが、自ら書くというのは相当の自信家で、また癖のある自我の持ち主だったようです。それでもなお詩の評価が高く、決して思い上がりではなかったので金農を非難することはできません。

■遊藝の壮年時代から晩年の帰郷

三十歳過ぎから金農は諸国を遊歴します。この諸国を漫遊芸歴の旅は五十七歳まで続きます。天下に知己を求め、精力的に芸術活動を行った時期です。この旅は過去の多くの書家詩人たちや、日本の西行や芭蕉のような諸国を行脚した乞食旅行ではなく、常に何人かの従者を従えたいわゆる大名旅行だったようで、時には経済的に逼迫して、妹の嫁ぎ先の家や友人の世話になっていったようです。

同郷の書画家篆刻家である丁敬は清朝の美術史に残る芸術家の一人ですが、生涯を通じて交友があり互いに影響をあたえあいました。この丁敬も癖の強い文人で人とは容易に相いれず、気が向かないと決して篆刻をしなかったようですから、自負心の強い金農と親友だったことは大変興味深いものがあります。

五十七歳のとき、金農は錢塘に帰ります。しかしすでに生家はなく、友人の梁啓心の家を最

初に友人宅や妹の家などに居候し世話になっていたようです。晩年を迎えてからの金農は、揚州に移り住んで書を売りながらの生活でした。揚州は塩で栄えた町で、多くの芸術家やパトロンが集まっていたところで、金農としても過ごしやすかったようで年に千金を得たこともありましたが孤独だったようです。この揚州時代の詩に

「揚州好厨釀 可惜是孤杯 揚州は料理も酒もいいが、たった一人で膳にむかうのでは……」と詠じています。尊大な自我の持ち主でも孤独には堪えがたく、晩年には仏の慈悲を求めて、仏教に帰依し、七十七歳で揚州の寺内、三生庵で亡くなりました。

隸書冊



この特異な隸書は晩年になっての作品で、筆先を裁断して書かれた裁鋒筆の体と言われる。五十歳頃までの金農は漢隸の八分隸法を学び、その上に独自の作風を完成した。

相逢う紅塵の内 高く擗す黄金の鞭 萬古垂柳の裏 君が家は阿那の邊

《大意》 紅い塵の立ちのぼる巷で出会った二人の若者。高々と黄金の鞭を振り上げて挨拶をする。枝垂れ柳につつまれて立ち並ぶ何万という家々。お宅はどちらのほうですか。(李白・相逢行)

詩は題す窓外の竹 茶は煮る石根の泉

《大意》 詩を書くには窓の外をのぞみ、茶を煮るには石の根本を流れる泉水を汲む。(劉延美)

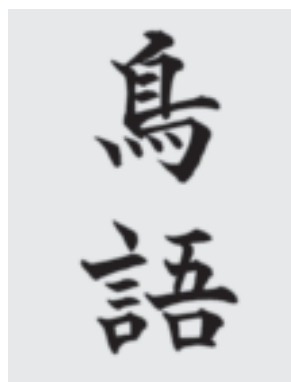
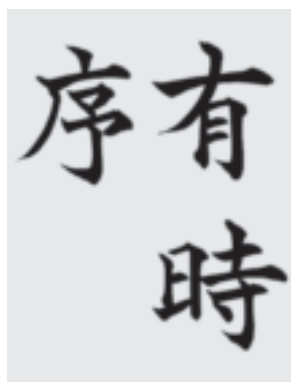
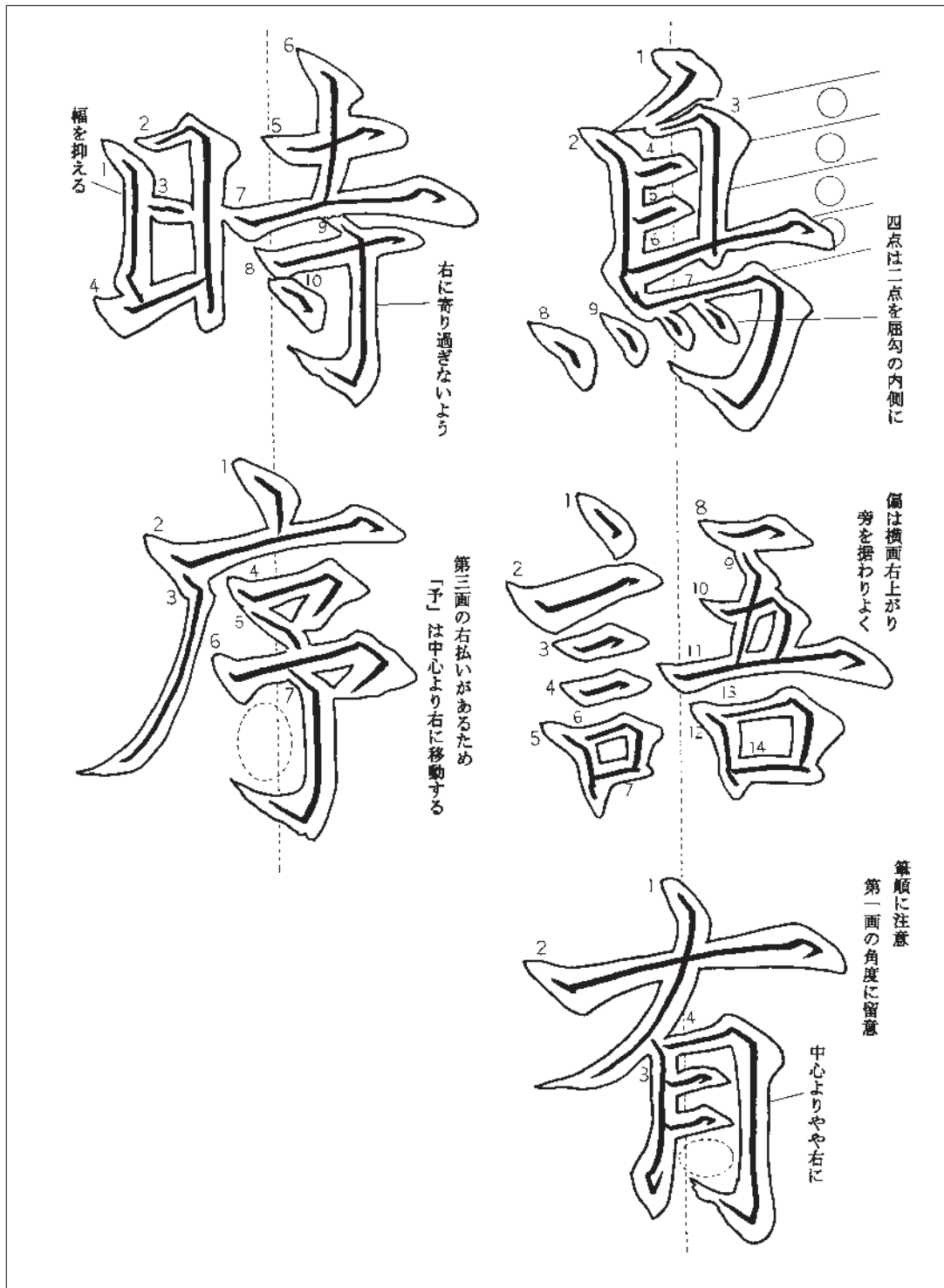
筆硯精良 人生一楽

《大意》 筆と硯が最良のものであれば、人生こんな楽しいことはない。風雅な文人の生き方。(蘇舜欽詩句)

読み 鳥語時序有り (鳥の鳴く声には時候を追って順序がある・黄任)

鳥語時序有り

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

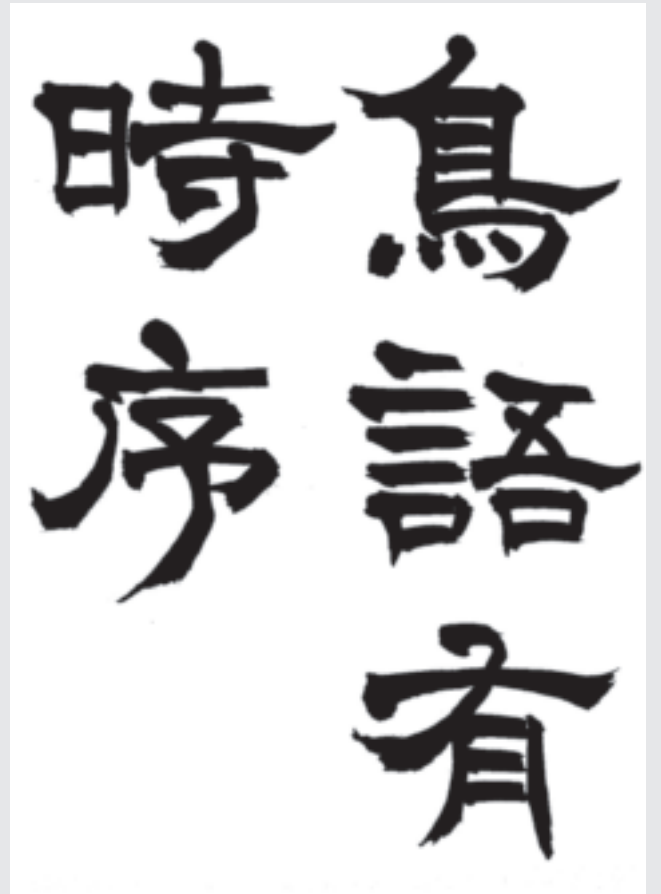
※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。



次号課題

隸書



(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
五月雨志		
集め早最上川		

松尾芭蕉

和泉溪石先生書

推位讓國有虞陶唐
 推位讓國有虞陶唐
 推位讓國有虞陶唐

佐藤象雲書

音

スイイジヨウコク
 ユウグトウトウ

略解

世が進み仁義を重んじるようになると聖者を選んで天下を治めた。陶唐氏は舜を帝位につけ、有虞氏は禹を王位につけて国を譲った。



百福を運めくらして(而)長く今なり

象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書(24)

『運百福長今』

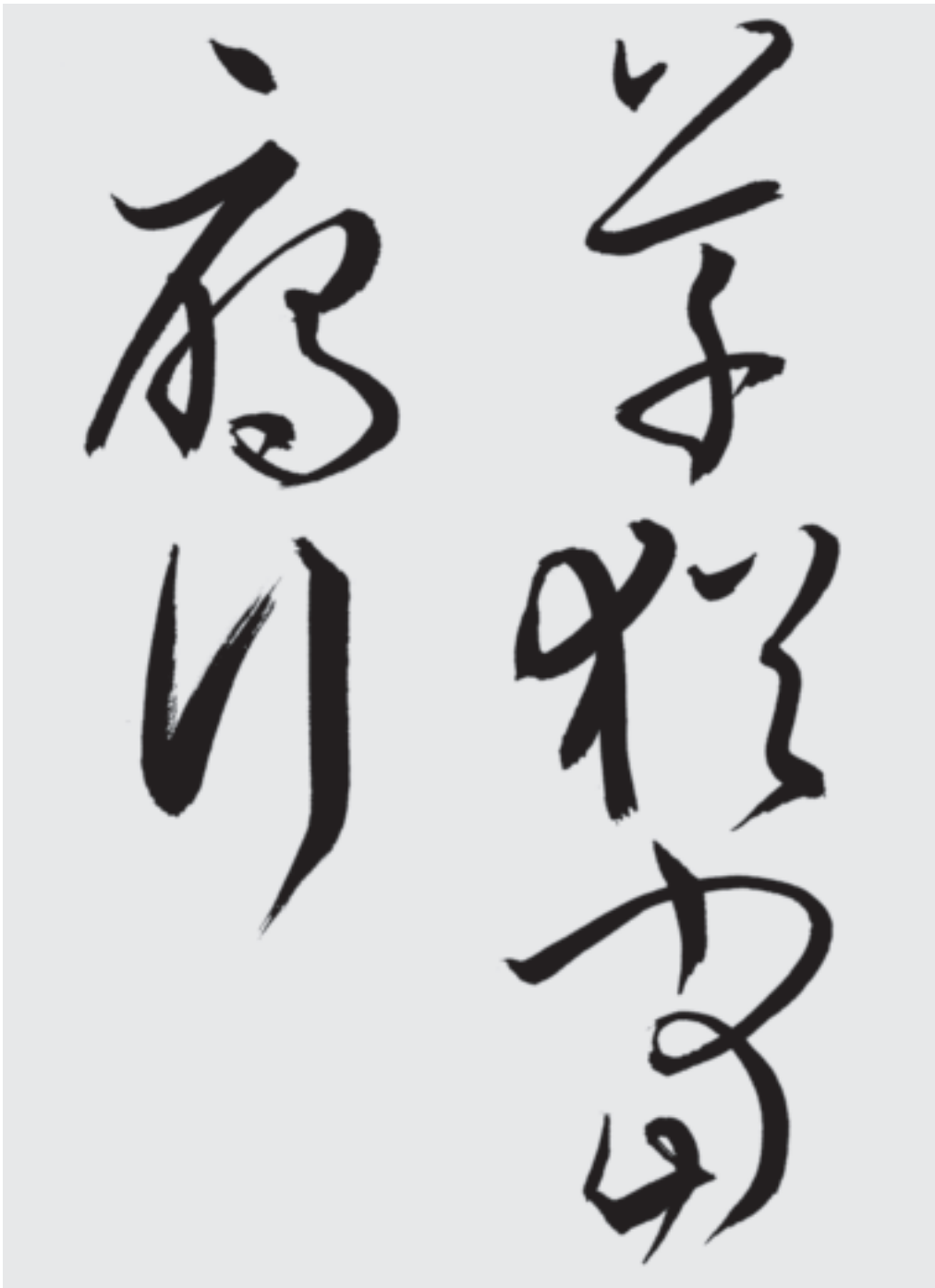
典型的な楷書は初唐時代に、歐陽詢・虞世南・褚遂良の三大家の手よって完成を見たといえます。その後も顔真卿や柳公権など楷書の能くする書人が登場していますが、後世に初唐三大家を超える書き手と評価されるまでにはいかなかったようです。米芾に至っては顔真卿を称して「悪札の祖」とまで罵っていますが、特に風韻という点では、三大家には一歩譲るといのが適切です。今月は文節によつて五文字を臨書します。

子粒可なり

(張の) 草には猶^なお^ま当^まに雁行すべし……

■孫過庭・書譜(初唐・西暦六八七年)の臨書(6)

象雲臨



『草猶當雁行』

書譜は王羲之の書法を尊崇する孫過庭の書論で、書作品として書き残す意図よりも、文章を推敲しながら書いているものです。そしてこの文章は四六駢儷体という四字と六字を重ねて典故のある語句を多く用い、さらに平仄を合わせて音調を整えるという、華美ながら大変難しい文体を用いて作られた書論です。したがって孫過庭は書の表現より文意に神経を集中して書いています。しかし無意識の中に見事な書に仕上がっています。今月の五文字は前回四月号の「當」と「行」が同じ文字ですが、これが至って自然に変化していることが判ります。これはまさに王羲之の書法を体得しているということです。王羲之の草書を学ぶのであれば、まず肉筆が現存しているこの書譜を学べといわれる所以^{ゆえ}です。